

接触場面と母語場面での母語話者の自己発話のくり返し —日常的な接触経験と対話相手の日本語レベルの観点から—

平山紫帆*

Self-Repetition of Native Speakers in Contact and Native Situations: Focused on Contact Experiences with Non-Native Speakers and Interlocutor's Proficiency Level

HIRAYAMA Shiho

Abstract

This paper, focusing on the repetition native speakers use in the first-time conversations in contact situations and native situations, examined whether or not there is any difference in the repetitions of own utterances (self-repetitions) the native speakers use according to the “daily contact experience with non-native speakers” and the “Japanese proficiency level of the person to talk to”. The result of the analysis revealed the followings; (1)The lower the Japanese proficiency level of the person to talk to is, the more frequently the native speakers who have more contact experiences use the self-repetitions. (2)The native speakers who have more contact experiences repeat their own utterances more spontaneously to the person whose Japanese proficiency level is low even if he or she does not seem to want it. (3)Regardless of the amount of contact experience, native speakers frequently use the repetitions of “particularization” and “clarification” to intermediate learners.

Keywords : self-repetition, contact experience, Japanese proficiency level, contact situation, native situation

1. はじめに

私たちは、日々の会話の中で、頻繁にくり返しを行っているが、そのくり返しには、大きく分けると、「自分の発話のくり返し」と「相手の発話のくり返し」がある。中田(1992)は、誰の発話をくり返すかということと、そのくり返しの機能には対応があるとし、自分の発話のくり返しは「一方的な表出のはたらき」が、他者の発話のくり返しは「相互作用的性格の強いはたらき」が特徴的に見られることを指摘している。従来、会話でのくり返しに関する研究は、コミュニケーション上の影響力の強い「他者発話のくり返し」に関心が向けられることが多かったが、自分の発話(以後、「自己発話」)のくり返しも、強く伝えたい部分を強調したり、相手が聞き取れなかった場合にその部分を明瞭にしたりするなど、コミュニケーション上、重要な役割を持つと考えられる。とりわけコミュニケーションでの支障がおきやすい接触場面では、自己発話のくり返しが果たす役割は大きいだろう。

だが、くり返しは時に冗長なものとして捉えられることもあり、多く使用すればいいというものではない。接触場面において、効率的かつ効果的に会話をするためには、母語話者が相手に応じてくり返しを使い分ける必要があると考えられる。では、実際に母語話者は、接触場面でそうした使い分けを行っているのだろうか。もし使い分けがあるのなら、それは非母語話者との接触経験と関係があるのだろうか。また、非母語話者の日本語のレ

キーワード：自己発話のくり返し、接触経験、日本語レベル、接触場面、母語場面

*平成28年度生 比較社会文化学専攻

ベルによっても違うのだろうか。さらに、その使用法は、母語話者に対する場合と異なるのだろうか。以上の関心のもと、本稿では、自己発話のくり返しに焦点を当て、非母語話者との日常的な接触経験と対話相手の日本語のレベルによって、自己発話のくり返しの使用法に違いがあるかを明らかにする。

2. 先行研究

2.1 自己発話のくり返し

会話での自己発話のくり返しに関する研究には、接触場面を扱ったもの (Knox 1994; 大平1999; Neil 1996)、母語場面を扱ったもの (中田 1992; 松田 1998; 黒川 2006) 等がある。

まず、接触場面での自己発話のくり返しに関して、Knox (1994) は、実際の社会的状況で録音された接触場面の自然会話をデータとし、参加者が使用する自己発話のくり返しを質的に記述した。その結果、自己発話のくり返しには、①聞き手の注意をくり返された部分に向けさせる、②話し手の伝達内容を聞き手が推測するのを助ける、③話題や参加者としての役割が移ったことを知らせる、という機能があることが明らかになった。

大平 (1999) は、接触場面でのインタビューデータをもとに、「質問—応答」連鎖における日本語母語話者の質問での言い直しの方法と、非母語話者の理解可能性との関係を質・量の両面から分析した。その結果、母語話者の言い直しには、「同義語、類義語の使用」、「パラフレーズ」、「くり返し」等の11種類が使用されており、頻度の面では「くり返し」が最も多いことが明らかになった。また、言い直しの方法によって、非母語話者が文脈に応じた応答ができるかを示す「成功率」には差があり、単独で使用されたくり返しは成功率が低いことが判明した。

他にも、Neil (1996) は、第三者接触場面の職場での会話をもとに参加者がどのような理解促進のためのストラテジーを使用しているかを探った。そして、自己発話のくり返しには要求されてくり返すものと自主的にくり返すものがあり、前者は明確化要求への反応、後者は発話の重なり後の再提示や、自己修復、強調といった機能があることを明らかにした。

次に、母語場面の研究としては、中田 (1992)、松田 (1998)、黒川 (2006) がある。中田 (1992) はくり返しを「会話の方策」の一つであるとし、雑誌に掲載された会話の文字化資料をもとに、くり返しを機能別に7カテゴリーに分類した。そして、「先行する発話の種類」、「出現のタイミング」、「形状」といったくり返しのタイプによって主な機能に違いがあり、使用される目的や表現効果が異なることを明らかにした。自己発話のくり返しに関しては、先行発話の直後に現れるくり返しと、間をおいて出現するくり返し、そしてそのどちらともいえないものがあるが、いずれの場合も主に一方的な表出のはたらきがあると分析した。

松田 (1998) は、「姉妹の雑談」「女子大生の雑談」「TV番組の対談」の3種類の談話をデータとし、談話の種類や談話参加者の人間関係の違いが、その談話で使用される反復表現の機能や現れ方にどのように影響するかを分析した。分析の結果、いずれの談話でも、情報量を増やし、コミュニケーションを進展させる「進展機能」の占める割合が、情報量は変化させないがコミュニケーションを支える「補強機能」よりも大きいこと、進展機能では、自分の発話の反復の割合が他者の発話の反復の割合よりもやや高いが、友人との雑談の場合には、姉妹の雑談や対談の場合に比べて、他者の発話の反復の占める割合が高くなっていること、補強機能では他者の発話の反復が圧倒的に多いことが明らかになった。

黒川 (2006) は、日本語の会話に現れるくり返しの機能を明らかにするために、母語話者同士の自由会話を質的に分析した。その結果、自己発話のくり返しには、①フィラー、②自己修復、③強調の機能が見られることが明らかになった。

以上の先行研究からは、自己発話のくり返しの機能や特徴が明らかになってきたが、いずれも個別の事例を質的に分析した研究が多く、自己発話のくり返しを量的に分析した研究は大平 (1999) 以外にはほとんど見られない。また、大平 (1999) は、「質問—応答連鎖」の質問部分に現れたくり返しにのみ着目しており、それ以外のくり返しの使用法は明らかでない。さらに大平 (1999) は、今後の課題として非母語話者との接触経験などの、調整能力を左右する要因に注目した分析の重要性を指摘しているが、自己発話のくり返しに関して、そうした研究はほとんどなされていない。

2.2 接触経験の調整行動に及ぼす影響

非母語話者との接触経験が母語話者の調整行動にどのように影響するかを探究した研究としては、増井（2005）、柳田（2015）などが挙げられる。

増井（2005）は、同じ母語話者が異なる非母語話者と短期間（7～10日間）に続けて行った5回の描画タスクのうち、1回目と5回目のタスク中の会話を比較することで、母語話者の修復的調整の変化を分析した。その結果、接触経験を重ねた母語話者は、修復的調整を頻繁に行うようになり、多くの種類の調整方法を使用するようになったことがわかった。また、「そのままの繰り返し」が減少し、くり返し部分を限定したり、新たな要素が付加された「加工された繰り返し」が増加していることが明らかになった。

柳田（2015）は、接触経験の異なる母語話者に初対面の非母語話者と情報のやり取りを行うタスクを行わせ、そこでのコミュニケーションの方略に接触経験がどのように関わるかを詳細に分析した。その中で柳田（2015）は、母語話者が情報を与える場面における自己発話の修正について分析を行い、自己発話の修正の種類には接触経験が大きくは関与しないが、接触経験の多い母語話者は、自発的な発話修正が多く、経験の少ない母語話者は非母語話者からの要求を受けてからの修正が多いことを明らかにした。

これらの先行研究から、接触経験の多寡が母語話者の修復の頻度や方法、さらには修復行動の自発性に影響を及ぼすことが明らかになっている。しかし、接触経験と非母語話者の日本語レベルを関連づけたものは管見の限り見られない。また、柳田（2015）のように、修復の一表現としてくり返しを扱っているものはあるが、修復以外のくり返しについては明らかでない。さらに、これまでの研究はいずれもロールプレイやタスクという、いわば人為的で、目的が明確な会話をデータとしており、その結果が自然な接触場面にも適用できるかは不明である。したがって、より自然に近い会話を分析する必要がある。

3. 研究課題

以上の先行研究を踏まえ、非母語話者との日常的な接触経験および対話相手の日本語レベルによって、自己発話のくり返しに違いが見られるかを明らかにするために、以下の研究課題を設定する。

RQ：母語話者の非母語話者との接触経験や対話相手の日本語レベルによって、母語話者の自己発話のくり返しには違いがあるか

- (1) 母語話者の自己発話のくり返しの生起数に違いがあるか
- (2) 母語話者の自己発話のくり返しの自発性に違いがあるか
- (3) 母語話者の自己発話のくり返しの機能別生起数に違いがあるか

4. 調査方法

4.1 くり返しの範囲

本稿は、中田（1992）にならい、くり返しを「既に発話されたことを再び発話すること」と定義する。

また、本稿は自己発話のくり返しを対象とするが、その範囲に関しては、中田（1992）を参考に、「先行発話が自分の発話として同一会話内で特定できるもの」（例1）とし、先行発話が自己発話か他者発話かの判断がつかないものは対象から外す（例2）。また、聞き手として聞いていることを示すあいづちのくり返しは対象に含めない（例3）。形状に関しては、①元の発話をほぼ同形でくり返すもの、②一部を変更したもの、③要素を補足したもの、④意味を保持した言い換え、も対象に含めることにする（表1）。

（例1^{1,2}）（下線部は先行発話、太字はくり返しを示す。以下同様。）

A：難しいよね。難しいでしょ、日本語。

（例2） A：で来週1個（うん）あって（うん）終わりですけど（うん）、やっぱり、レポートが4つぐらい。

B：4つぐらい？

A: 4つぐらいありますね。(←自己発話のくり返しか他者発話のくり返しか特定できないので対象外とする)

(例3) A: ま、前も観光に(うんうんうん)来たことがあるから、そんなにショック、なことはないけど(笑い)。(←あいづちのくり返しは対象外とする)

表1 対象とするくり返しの形状

	定義	例
①再現	ほぼ同じ形でくり返したもの	A: いいね、いいね、途中下車で。
②一部変更	多少の変更を加えたもの	A: すごい <u>かっこいい</u> 、って思って。 かっこいいじゃないですか(笑い)。
③補足	くり返す際に情報を追加したもの	A: あ、それはだめだけど。 それはうちもだめだけど。
④言い換え	意味を保持して言い換えたもの	A: でもぜん、全部 <u>上り電車</u> なの、今度は。 B: えー。 A: まあ <u>中央</u> に来る(電車だから){<}

4.2 データの概要

本研究のデータは、日本語母語話者8名が、日本語中級学習者、上級学習者、及び日本語母語話者とそれぞれ一対一で行った初対面会話(計24会話)のうち、開始から10分間、計240分間を宇佐美(2007)に従い文字化したものである。

分析対象となる母語話者8名は、都内の大学や大学院に在籍する日本語母語話者の女性(20歳から23歳)である。そして、このうちデータ収集時点で、日本語による特定の非母語話者との接触が週に1度以上あり、それが半年以上継続している人を「接触経験の多いグループ」(4名)、そのような接触経験がないか、過去に経験があっても、接触のない時期が調査時点で3年以上続いている人を「接触経験の少ないグループ」(4名)とした。

会話相手は、都内の大学及び大学院に在籍する学生(平均年齢22.7歳)で、会話相手による違いが生じないよう、学習者の国籍は台湾で統一し、中級学習者、上級学習者、日本語母語話者の計3名は固定した。学習者の日本語能力は、日本語中級クラスに在籍する交換留学生を中級学習者、大学院で日本語を研究する大学院生を上級学習者とみなした。

会話の話題は指定せず、自由に会話をするように依頼した。

4.3 くり返しの自発性

本稿は、Neil(1996)、柳田(2015)を参考に、母語話者の自己発話のくり返しを自発性の観点から「自発的
自己発話のくり返し」と「要求後自己発話のくり返し」に分類する(表2)。

表2 くり返しの自発性の分類

	定義	例
自発的 自己発話 のくり返し	自主的に行う自己発話のくり返し	A: そうですね、なんか私の学年から、 <u>卒論??</u> あの <u>卒業論文</u> が必修になったんですよ。
要求後 自己発話 のくり返し	明確化要求等の何らかの反応要求を受けて行う自己発話のくり返し	A: 拝島って聞いたことあります? B: 拝?。 ←明確化要求 A: 拝島。

4.4 くり返しの機能

本稿は、黒川 (2006)、Neil (1996) を参考に、自己発話のくり返しを①詳述化、②明瞭化、③強調、④間つなぎ、⑤談話構成、⑥その他に分類する (表3)。

表3 くり返しの機能

	定義	例
①詳述化	言い換えたり、説明を加えたりする	A: あっちは長崎屋と西友があるんですけど (あー)、 武蔵小金井 には。
②明瞭化	情報を再提示する	A: 下り電車だからか。 B: くだ電車? A: 下り電車 。
③強調	特に重点を置く部分を明確に示す	A: え、 <u>見たい見たい</u> 。写真撮っとういてくれた?。
④間つなぎ	次の発話を生み出すために間をつなぐ	A: あと、 <u>何だ、何だろう</u> (く笑い)、スコールがすごかったこととか (笑いながら)。
⑤談話構成	談話の構成を明示したり、話題を戻すなどの談話運営を行う	A: <u>でもちょっと行ってみたい気もするんですけどー</u> 。 B: うん。 A: んー、でも、あんまり長い期間 (ん) 行かなくてもいいかなっていう。 (中略。留学が大変そうだという話が続く。) A: <u>そうでも行ってみたいんですけどね</u> 。
⑥その他	①～⑤に含まれないもの	A: 出身は、 <u>台湾</u> ?。 B: はい。 A: じゃあ、えっと、 <u>台湾</u> の、どの、辺で。

以上のくり返しの認定・分類について、日本語教育を専門とする母語話者の研究協力者1名との一致率を求めた。全データの1割を対象に、各自がくり返しを認定し、その一致率を求めたところ、一致率は81.2%であった。一致しなかった箇所は協議の上決定した。その後、くり返しの自発性、機能についても同様に一致率を算出したところ、自発性は78.2%、機能は88.6%であった。

5. 結果

5.1 くり返しの生起数

今回のデータは総発話文数5,641 (母語話者2,751、対話相手2,890) であった。くり返しに関しては、合計491 (接触経験が多いグループ248、少ないグループ243) の自己発話のくり返しを得られた。接触経験が異なる母語話者が、中級学習者、上級学習者、母語話者との会話で使用した自己発話のくり返しの生起数の平均を図1に示す。これを見ると、接触経験の多い母語話者は、中級学習者に対して平均30.0回、上級学習者、母語話者に対してはそれぞれ20.8回、11.3回のくり返しを用いており、次第にその平均値が減少していることがわかる。しかし、接触経験の少ない母語話者にはそうした傾向が見られない。

そこで、これらに統計的な有意差があるかを見るために、この生起数について「接触経験 (2水準) × 対話相手 (3水準)」の2要因分散分析を行った。その結果、接触経験と対話相手の交互作用 ($F(2,12) = 10.00, p < .005$) と対話相手の主効果 ($F(2,12) = 11.12, p < .005$) が見られた。単純主効果検定およびライアン法による多重比較検定の結果、接触経験の多いグループが中級学習者、上級学習者、母語話者に使用するくり返しの生起数は、すべての組み合わせで有意差が確認された ($p < .05$)。すなわち、接触経験の多い母語話者は、相手の日本語のレベルが低いほど自己発話のくり返しを多用するということが言える (図1)。

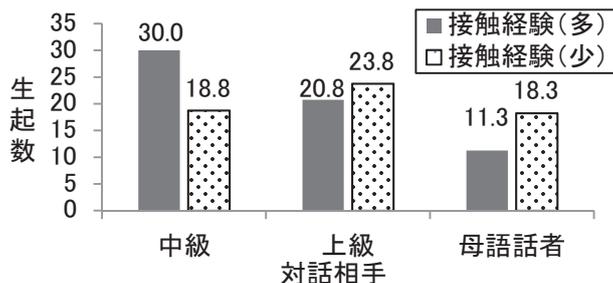


図1 くり返しの生起数 (平均)

5.2 くり返しの自発性

今回のデータで得られた全491のくり返しのうち、「自発的自己発話のくり返し」は458、「要求後自己発話のくり返し」は33であった。図2と図3に、接触経験に違いのある母語話者が、中級学習者、上級学習者、母語話者との会話で使用した「自発的自己発話のくり返し」と「要求後自己発話のくり返し」の生起数の平均をそれぞれ示す。

この自発的、及び要求後の自己発話のくり返しに関して、「接触経験 (2水準) × 対話相手 (3水準)」の2要因分散分析を行った。その結果、「自発的自己発話のくり返し」は、接触経験と対話相手の交互作用 ($F(2,12) = 8.80, p < .005$) と対話相手の主効果 ($F(2,12) = 7.55, p < .01$) が見られた。単純主効果検定およびライアン法による多重比較検定の結果、接触経験の多い母語話者の中級学習者、上級学習者、母語話者に対する「自発的自己発話のくり返し」の使用数は、対話相手のすべての組み合わせで有意差が見られた ($p < .05$)。つまり、接触経験の多い母語話者は、相手の日本語レベルが低いほど自発的くり返しを多用すると言える。

「要求後自己発話のくり返し」は、対話相手の主効果 ($F(2,12) = 9.00, p < .005$) のみが確認された。ライアン法による多重比較検定の結果、中級学習者への「要求後自己発話のくり返し」の生起数は、上級学習者と母語話者に対する場合よりも有意に多かった ($p < .05$)。母語話者は中級学習者の反応要求に自己発話のくり返しを使用することが多いと言える。

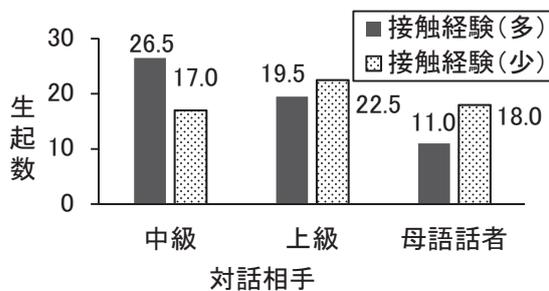


図2 自発的自己発話のくり返し (平均)

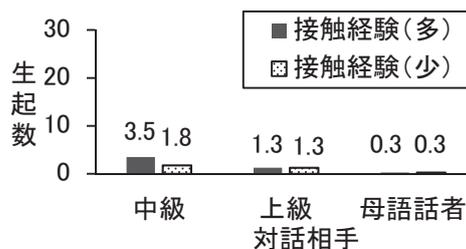


図3 要求後自己発話のくり返し (平均)

5.3 機能別生起数

本研究の全491のくり返しを機能別に分類したところ、「詳述化」が213、「明瞭化」が30、「強調」が177、「間つなぎ」が26、「談話」が26、「その他」が19得られた。

これらについて、機能ごとに「接触経験 (2水準) × 対話相手 (3水準)」の2要因分散分析を行ったところ、「詳述化」「明瞭化」「強調」は、対話相手の主効果のみが見られた (詳述化: $F(2,12) = 6.28$, 明瞭化: $F(2,12) = 5.79$, 強調: $F(2,12) = 4.87$, いずれも $p < .05$)。ライアン法による多重比較検定の結果、「詳述化」は、中級学習者に対する使用が母語話者に対する場合よりも有意に多く ($p < .05$)、「明瞭化」は、中級学習者に対する使用が上級学習者や母語話者に対する場合よりも有意に多かった ($p < .05$)。一方、「強調」は、上級学習者に対する使用数が、中級学習者や母語話者に対する場合よりも有意に多かった ($p < .05$) (図4~6)。

つまり、接触経験によらず、母語話者は中級学習者には「詳述化」や「明瞭化」のくり返しを多用し、上級学

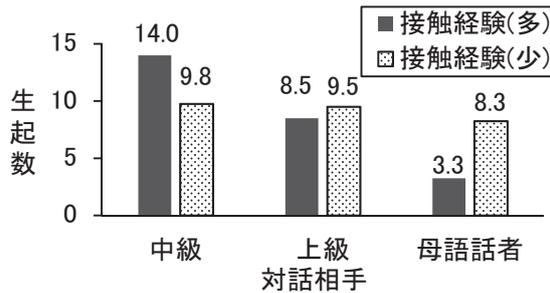


図4 「詳述化」のくり返し (平均)

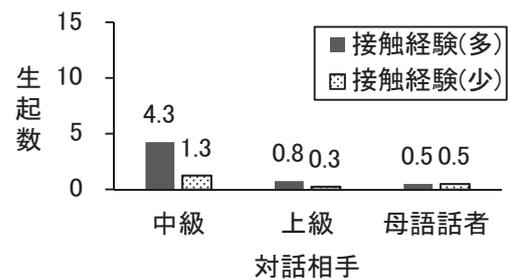


図5 「明瞭化」のくり返し (平均)

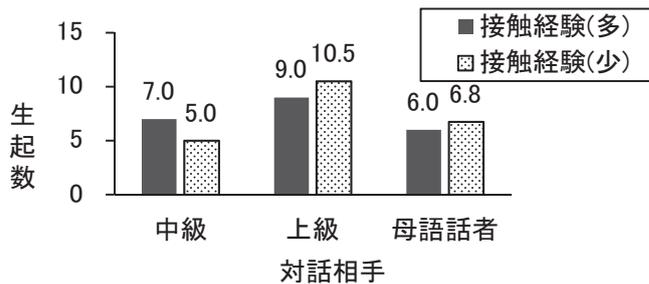


図6 「強調」のくり返し (平均)

習者には「強調」のくり返しを多用していると言える。

「間つなぎ」「談話構成」「その他」では、「接触経験」と「対話相手」の交互作用や主効果は確認できなかった。

6. 考察

今回の結果から、(1)接触経験の多い母語話者は、相手の日本語レベルが低いほど、自己発話のくり返しを多用する、(2)接触経験によらず、母語話者は中級学習者からの反応要求に対して自己発話のくり返しを多用するが、接触経験の多い母語話者は、非母語話者からの働きかけがなくても、日本語レベルの低い相手には、より自発的に自己発話をくり返していることが明らかになった。また、(3)接触経験に関係なく、母語話者は、中級学習者に対しては「詳述化」「明瞭化」のくり返しを、上級学習者に対しては「強調」のくり返しを多用することも明らかになった。

では、なぜ接触経験の多い母語話者は、より日本語レベルの低い相手に対して自己発話のくり返しを頻繁かつ自発的に行うのだろうか。以下、会話データを用いて考察を行う。

会話例1 (NNM: 中級学習者、BA03: 接触経験の多い母語話者)

	話者	発話内容	自発性	機能
1	BA03	なんか、チュータータイムとかで、(うん) あの、 <u>放課後とかに、</u>	自発	詳述化
2	NNM	ほかほかかご？。		
3	BA03	<u>放課後に、</u> (うん) //、	要求	明瞭化
4	BA03	えー <u>放課後</u> //、	自発	間つなぎ
5	BA03	(授業){く} <u>終わった後に、</u> (うん) 食堂とかで、(うん) よく、しゃべって るのを見たりとか。	自発	詳述化

会話例1は、BA03が以前にNNMを見かけたときの様子を説明している部分である。1においてBA03は「チュータータイム」と切り出したが、すぐにそれを「放課後」と言い直している。これは、相手が理解できな

いことを予測して、別の表現に切り替えたのだと思われる。それをうまく聞き取れなかったNNMが明確化要求を行うと、BA03は、3で「放課後に」とまず当該部分を再提示し、4で「えー放課後」と言い淀んだ後、「授業終わった後に」と言い換えを行った。明確化要求に対するくり返しだけでは、意味が十分に理解できないことを察知し、5でより具体的に言い換えたのだと解釈できる。これを見ると、BA03が相手の反応を想定しながら、様々なくり返しを駆使して会話を進めていることがわかる。

会話例2 (NNM: 中級学習者 BA02: 接触経験の多い母語話者)

	話者	発話内容	自発性	機能
1	NNM	え、行ったことある？。		
2	BA02	ないです。		
3	BA02	ないですけど先ほど話してた人が台北だったんですよ。	自発	談話構成

会話例2でBA02は、1の質問にまず短く返答し、それをくり返して談話を展開させている。発話を短く切ることで、一つ一つが理解しやすくなり、かつ、くり返して発話同士のつながりが明確になっている。また、くり返しによって、新しい情報が来るまでの時間ができ、相手が発話内容を消化するゆとりが生まれていると考えられる (Tannen, 2007)。

上記2例に見られるようなくり返しは、特に日本語レベルの低い相手の場合には有効な手立てだと考えられる。だが、こうしたくり返しは、多すぎるとコミュニケーションの進展を阻害しかねず、相手の日本語力に応じた対応が必要になる。柳田 (2015) は、母語話者は接触経験を通じ、「非母語話者の不理解の予測と問題発生の予防」のための言語的調節ができるようになる」と指摘している。そうであるならば、接触経験の多い母語話者は、接触経験を重ねることで、相手に起こりうる不理解の程度や問題の大きさの察知と調節ができるようになるとも考えられるのではないだろうか。また、柳田 (2015) は、接触経験の多い母語話者は非母語話者からの不理解表明や発話修正の要求がなくても、相手の不理解を見越して自発的に発話修正を行うようになる」と述べている。自己発話のくり返しに関しても同様に、不理解の生じやすい相手には、それを察知して、より自発的にくり返しを行うようになる」と考えられる。今回のデータで、接触経験の多い母語話者が、相手の日本語レベルが低いほど多くのくり返しを自発的に使用していたのは、そのためではないだろうか。

一方、機能に関しては、母語話者は中級学習者には「詳述化」「明瞭化」のくり返しを多用していたが、そこに接触経験による差は見られなかった。

会話例3 (NNM: 中級学習者 BU03: 接触経験の少ない母語話者)

	話者	発話内容	自発性	機能
1	NNM	学校の、学校の数??も、増える。		
2	BU03	/沈黙4秒/あーじゃあやっぱり、その日本だと、結構、定員割れって言って、募集してる人数よりも、来てくれる学生の人数の方が少ないことが(へー) あって、//,	自発	詳述化
3	BU03	結構大変な、[以下やや小声で]〈経営が大変みたいなんだけど〉{〈}。	自発	詳述化
4	NNM	〈あーだから、が、え、〉{〈} え、原因は、学校の数が〈多過ぎで〉{〈} ?。		

会話例3のBU03の発話は、2の「定員割れ」が「募集してる人数よりも、来てくれる学生の人数の方が少ない」に言い換えられ、3の「大変な」は「経営が」が補足されて詳述されている。今回のデータから、接触経験に関わらず、母語話者が中級学習者に対して「詳述化」や「明瞭化」の、いわば伝達内容を明確にするくり返しを盛んに行っていることが明らかになった。母語話者はもともと日本語レベルの低い相手に対し、内容を分かりやすくするための修正行動を積極的に行う傾向があり、それは接触経験の影響を受けにくいと言える。柳田 (2015) は、日本語教育の知識のない母語話者の場合、接触経験が自己発話の修正の種類に及ぼす影響は小さいと指摘しているが、今回の結果からも、母語話者の言語行動には接触経験の影響を受けやすい面と受けにくい面があることが明らかになった。

7. 今後の課題

以上の結果から、非母語話者との接触経験や対話相手の日本語レベルにより、自己発話のくり返しには違いがあることが明らかになった。これは、接触場面での母語話者のくり返し、ひいては母語話者の調整行動の特徴を明らかにする上で意義があるものと思われる。

しかし、本稿には課題も残されている。まず、本稿では対話者の影響を抑えるために対話者を固定した。そのため、今回の結果が他の対話者にも適用されるかは不明である。また、今回は母語話者の発話に注目したが、母語話者のくり返しの実態を明らかにするためには、対話相手の発話との関係も詳細に分析する必要がある。今後の課題としたい。

【註】

1. 本稿の会話例はA：母語話者、B：対話相手である。
2. 本稿の例で用いた主な記号は以下の通りである。(宇佐美 2007による)
 - 。 1 発話文が終了したことを示す。
 - ?。 質問や確認の発話文が終了したことを示す。
 - < >{ < > } で囲まれた部分が、他者に発話を重ねられた部分であることを示す。
 - < >{} < > } で囲まれた部分が、発話を重ねた部分であることを示す。
 - () 相手の発話に重なる、短く、特別な意味を持たないあいづちを示す。
 - < > 笑いながら発話したものと笑い等の説明を記す。

【参考文献】

- 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2) (研究代表者宇佐美まゆみ) 研究成果報告書
- 大平 未央子 (1999) 「接触場面の質問：応答連鎖における日本語母語話者の『言い直し』」『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集』3, 67-85.
- 黒川直子 (2006) 「日本語の談話における繰り返しの考察」『Icu日本語教育研究』3, 65-79.
- 中田智子 (1992) 「会話の方策としてのくり返し」国立国語研究所 (編) 『国立国語研究所報告 104 研究報告集13』267-301.
- 増井展子 (2005) 「接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化—共生言語学習の視点から」『筑波大学地域研究』25, 1-17.
- 松田文子 (1998) 「日常談話における反復表現の機能に関する一考察」『言語文化と日本語教育』16, 58-69.
- 柳田直美 (2015) 『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略—情報やりとり方略の学習に着目して—』ココ出版
- Knox, L. (1994). Repetition and relevance: Self-Repetition as a strategy for initiating cooperation in Nonnative/Native speaker conversations. In B. Johnstone (Ed.), *Repetition in discourse interdisciplinary perspectives volume one* (pp.195-206). New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- Neil, D. M. (1996). *Collaboration in intercultural discourse : Examples from a multicultural Australian workplace*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Tannen, D. (2007). *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. (2nd ed.) New York: Cambridge University Press.